

地理的素養についての一考察

大 嶽 幸 彦

(平成8年4月8日受理)

要 旨

本稿は地理的素養の問題に関し、内外の文献を基に若干の考察を行なったものである。地理的素養の形成には様々な経路が考えられるが、本稿では特に長期の旅行と地理的素養の形成に関し、論じた。地理的素養の実質については地形学的知識をふやすこと、景観を凝視し分析すること、徒歩旅行を実施することの面から考察した。

KEY WORDS

Geographical Attainments 地理的素養
Long-Period Travel 長期の旅行
Landscape 景観 Trip on Foot 徒歩旅行

1 はじめに

地理学の本質については多くが書かれてきたし、述べられてもきたが、地理学者の本質についてとなるとはるかに少ないとは、ジョン・ライトが1947年に論文「Terra incognita」の中で述べた言葉である¹⁾。筆者が拙著『国際化時代の地理学²⁾』（1980年）以来、追究してきたテーマの1つは、アカデミックな世界に限らずいわゆる地理学者がどのように形成されてきたのかを明らかにすることにあった³⁾。別の視角から述べれば、1人の個人の中で地理的素養が如何にして形成されてきたのかを論ずることにあつたともいえる。しからば地理的素養とは一体何であり、いかなるプロセスを経て身につけていくことが可能であろうかということが、次に問題となってくる。この点に関しては、拙著『旅と地理思想』の中での諸論稿や、その後、拙稿「地理的思考と地理的想像力に関する一考察」の中で既に一部、論じてきた。そこでの論議を一言で要約するとすれば、次の通りにまとめられる。拙著においては旅行者が旅を通じ、かつ長年月の地理的著作・地理的思考を経て地理学者となった点を論じたことにある。上述の拙稿の中では、地理学や地理学者に何が期待できるかを問うた。そして、地理学自体が有効なのではなく、長年、地理的想像力を働かせ、地理的思考を積んだ個人個人の能力の開発、活用の如何にかかわっている点を指摘したのである。本稿は地理学史で扱うところの地理学者の生涯そのものを追うことで問題にせまるのではなく、特に地理的素養の面に限定し、内外の文献を基に若干の考察を加えたものである。その際、叙述は出きるだけ簡潔になるように試みてみた。というのは、「簡潔に書くには重要な部分だけを選択することが必要となる。説明が長すぎると、

不釣合なほど瑣末的な事柄のリストができる⁴⁾。」にすぎないからである。反面、これでは十分に意が伝わらない恐れも多々出てくとも思われるが、長々と引用する風潮が無いわけではない今日に対する1つのアンチテーゼと考えている。

2 旅と地理的素養の形成に関する若干の考察

さて、中国を旅行した後、旅行日記を著わし、地理学に開眼した地質学者のフェルディナンド・フライヘル・フォン・リヒトホーフェンの例を待つまでもなく、地理的素養の形成と長期の旅行との関連についてはよく言われる視座である⁵⁾。それゆえ、以下、ここではいくつかの事例だけを取り上げ、若干の考察を加えてみることにした。

まず、フランスのストラスブール大学地形学教授であったアンリ・ポーリックは、最初ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの助手を務めていた。しかし、27才の時に職を辞し、合衆国へ向かった。かの地形輪廻(デービス自身は Geographical Cycle 地理輪廻と呼んでいる)説を唱えたウィリアム・モーリス・デービスの下で7年間研究を続けると共に、合衆国内を隅なく旅行した。1913年にはパリに戻っている⁶⁾。その旅行が後年、世界地理 Géographie Universelle 叢書の第13巻『北アメリカ地誌』(1935年)を書く際の基礎となっている。(図1)元々歴史学と考古学の専攻であったフランス地理学派の総師、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは、アテネのフランス人学校へ赴任した後に地理学への興味が増したのである⁷⁾。それにはアテネ滞在中にギリシア、イタリア、小アジアを含む地中海地域を広く旅行したことが大きいといわれている。イギリスのウォルター・フリーマンはメソディスト派伝道者の息子として生れたが、両親と多くの場所を巡回したことで、人々、景観、歴史に対し鋭い好奇心を持つようになり、さらには国際平和や戦争に対する展望さえ述べるに至った⁸⁾といわれる。この事例にあっても地理的素養の大きな開花といえよう。少年時代にオーストリア・ハンガリー帝国内を旅行したことが、早熟の年令で景観と人々についての好奇心を目ざめさせるきっかけとなった¹⁰⁾のは、ウィーン大学のハンス・ポベックの例にみることができる。長年の旅行が地理的素養に磨きをかけ、世界地誌を編纂させた典型的な例はエリゼルクリュエの場合である¹¹⁾。「エリゼルクリュエはアナキスト的思想の持主であったため、1871年のパリ・コミューン以後、1889年まで国外に逃亡しなければならなかった。これらの年月、オーストリア・ハンガリー、エジプト、チュニジア、アルジェリア、イタリア、スペインとポルトガルを旅行している。1892年には『新世界地理』でパリ地理学協会より金メダルを受章している¹²⁾。」

地理的素養の実質的内容に関しては、次に検討することにするが、地理的素養への芽ばえは早くは子ども時代にあるのである。というのは、アンヌ・バッチマーの述べるように、「特異な場所や旅行、家族と学校についての子ども時代の経験を通して、自分の周囲 Surrounding についての意味や秩序を識別するプロセスを経て動くようになる¹³⁾。」からである。従って、子ども時代に1人で旅行することは原則として許可されていない時にあっては、親が各地に連れて歩くことは地理的素養の芽を伸ばす意味でも必要なことである。ところが、「悲しむべきことに、地図を読むという、幼い子どもたちには一見して‘自然な’能力が、いったん学校に通うとしばしば部分的に失われるらしいということである。善意の教育者は子どもにとって明白であったものを複雑にする¹⁴⁾。」けれど、大人である教育者にとって平明で簡単であることを、毎年のように

に教え続けるのに耐えられないのであろう。それゆえ、地理的素養の芽が早々とつまれてしまうことになりはしまい¹⁵⁾。しかしながら、大人になって写真機や8mmのカメラを回す人々は、意識するとしなは別として地理的素養の一部を再び発揮しているのである¹⁶⁾。旅行が地理的素養の形成にとって如何に肝要であるか、ルイ・パピーはアルベルト・ドゥマンジョンの現地指導から、次のように述べている。「地理学者として旅行することは、景観をいかに分析するか

GÉOGRAPHIE UNIVERSELLE

publiée sous la direction de

P. VIDAL DE LA BLACHE

ET

L. GALLOIS

TOME XIII

AMÉRIQUE
SEPTENTRIONALE

par

HENRI BAULIG

Professeur à l'Université de Strasbourg

PREMIÈRE PARTIE

GÉNÉRALITÉS — CANADA



LIBRAIRIE ARMAND COLIN

103, BOULEVARD SAINT-MICHEL, PARIS

1935

Tous droits de reproduction, de traduction et d'adaptation réservés pour tous pays.

図1 アンリ・ボーリック著『北アメリカ地誌』(1935年)

を知ること、人間が景観に何を加えたかを学ぶことである¹⁷⁾。」地球上の至る所に人間集団が足跡を残すようになった今日、手つかずの原始景観はほとんど残っていないといえる。

以上みてきたように、地理的素養は幼年時代からの長年月にわたる地理的興味・関心を持続させることによって身につけ、一生を通じて磨かれていくべき性質のものである。

3 地理的素養の実質——ヘットナーの所説を中心に——

地理的素養については、アルフレッド・ヘットナーが名著『地理学、その歴史、本質および方法』の中で詳しく論じている¹⁸⁾。以下、主要な部分を抽出し、考察を加えてみたい¹⁹⁾。地理的素養についてはまず、次の点を挙げている。

第1に、地形学的な知識 (topographisches Wissen) である。この地形学的な知識は、地形以外では素養が非常にある人間であっても、地形学的素養は少ないのが普通である。(守田 優 訳, p.115)

次に、地理学的素養は明白な表象 (Anschauung) と諸地方それぞれにその関係を理解することにある。表象は地方の像の意味だけではなく、その全体的な本質や性格、間接的に地理学的と識別できる現象もまたこれに属している。(同上, p.116)

多くの人がある地域をいかにぼんやりと、そして理解することなく歩き、その地域についてはごくわずかししか眼にとめていないかについては驚くほどである。(同上, p.118)

以上の3つの引用例²⁰⁾から言えることは、ある地域を熟視し、心に留める努力をしなければ何も見えてこないし、地理的素養の形成にも役立たないということであろう。心に刻む景観としては、山、川、平野などの地形をまず最初に念頭に置くことが望ましい。先に、長期の旅行が地理的素養の形成に果す役割を述べたが、駆足の旅行が必ずしも地理的素養を磨くとは限らないことのある点は、次にみる通りである。

「私は多くの世界観光客と日本、中国、インドで出会ったが、それらの観光客は「好奇心 (Curios) から若干の寺や店を知るだけで、その地方については夢にも知らないのである。夜に乗物で行くべきではなく、窓から外を見るべきである²¹⁾。」(同上, p.123)

以上の点は筆者が学生時代の頃、ある教官から車窓観察をするためにも、日中、各駅停車の列車で移動すべきであると教えられたことと符号する。しかも、絶えず2万5千分の1の地形図5万分の1のそれを読みながら景観 Landscape の観察を行なうことで、地理的素養がきたえられるのである。バスによる車窓観察についても同様である。どのようにして地理的素養に達するかに関しては次の考察がなされている。

「いかなる経路 (Wege) で地理学的な素養に達するのか、どのような手段がそのためには我々の意のままになるのかの問題が生じてくる。つまり、その場合に、地理学的な知識の獲得のみが重要なのではなく、地理学的な能力、すなわち、ある場所の、ある大陸の、地球の地理学的な内容を全体として精神的にとりあげるような地理学的な能力が非常に重要であり、本来の地理学的な能力である。第1は地理学的な熟視 (Anschauung) であり、それ故、遍歴 (Wandern, 徒歩旅行, 筆者注) と旅行 (Reisen) である。…ただし、自己の熟視は地球の断片に限られる。したがって、補助としては、絵 (Bilder), 旅行記 (Reisebeschreibungen) が役立つのである。その他、講演、地図などである²²⁾。」(同上, p.123)

現在風に言えば、さらに衛星テレビ、映画、CD-ROM等の映像もつけ加えることが可能であるが、ここにおいて徒歩旅行や旅行が第1番目に置かれていることが注目される。しかし、高速で進む車での旅行は前方のみを見ることになり勝ちで、次々と過ぎ去る車窓風景を記憶にとどめておくことは困難である。次に、地理的素養の価値に関し、ヘットナーは次のように述べている。

「真の地理的素養を得たいと思う者は、地理学的に物を見、考え、学ばねばならない。しかし、地理学的に見て考えるということは、…自然は全体として、大地の形態や性質、水の流路、天気の平均的な性態、植被や動物界の刻印、人口の大きさや構成、経済的な生産物や生活方法を観察し、それを因果関係で説明することである。…我々が散歩したり、旅行したりすると、景観やその住民の犠牲が取り上げられる場合には、無意識的ではあるが、皆はこの地理学的思考を覚える²³⁾。」(同上、p.121)

つまり、人は本来、皆、地理的素養の基礎を持っていたということである。しかしながら、地理的素養は次第に忘れ去られ、地理的事象に対し興味をひかれなくなるか、見ている事象を地理的事象とも思わず無意識の日常世界に埋没してしまうということであろう。別の観点から地理的素養についてヘットナーは次のようにも述べている。

「地理的素養の第1は故郷(Heimat)の理解、あるいは一般的に言うと外界(Umwelt)の理解である。…戦争においては、多くの人々、兵士や将校もまた、地図を読んだり、簡単な見取図を描いたり、一般に単純な野外の地形(Geländeformen)を正しく把握すること、地形の差を岩石によって理解すること、地上と地中の水の配分をある程度まで判断すること、などの多くについて無能さを明らかに示している²⁴⁾。」(同上、p.118)

地形・水文的事象を見ても地理的素養を磨いていなければ、何も見えてこないということであろう。又、別の箇所では次のように述べている。

「我々のすべての生活はこの地で、ドイツの場所やドイツの根源にもとづくものであるから、ドイツ国の知識は必要である。しかし、外国をおろそかにするべきではない。というのは、外国の知識は外国と我々とのあらゆる関係のための前提となるからである²⁵⁾。」(同上、p.120)

上にみる如く、地理的素養は外国、世界を知ることからも形成されるのは言うまでもない。個人個人としては、たった1つの変数を凝視することによってではなく、事象の多様性を表面的に一べつすることによって、我々は世界についてもっとも早く学んでいるのではあるが²⁶⁾。

4 おわりに

本稿はアルフレッド・ヘットナーの地理的素養に関する考察に触発されながら、筆者がこれまで読み進めて来た内外の文献を再び読み直し、地理的素養に関して若干の考察を試みたものである。このテーマを取り上げた理由の1つは、研究の専門化・細分化の一層の進行の中で、地理学の解体の恐れなしを憂慮するためであった。ロナルド・アブラーの述べるように、「地理学という用語の前に絶えず、形容詞を置いて〇〇地理学というと、地理学が何か派生的なもののように思われる。その意味するところは、地理学の理論や内容を他の科学から借用している」と取られることである²⁷⁾。本来、地理学は諸事象を総合化し、説明 Explanation を加えることをねらいとしてきたのではなかったろうか。財政的理由から大学の縮小が始まり、地理学者は

残ったとしても、地理学教室の閉鎖がいくつか続いた合衆国においては、「大学の管理者、政府機関のトップ、企業のリーダーが地理学を競合的な教育と実践に絶対的に必要なものとは考えていない事実」に学問としての災難がある²⁸⁾。」といわれた時期があった。合衆国でのこうした厳しい現実を対岸の火事として見ているのではなく、本論で述べたような地理的素養に一層の磨きをかけ、地理学の有効性を訴え続けてゆかなくてはなるまい。石川義孝はアメリカ地理学者協会(A. A. G.)の会長演説を紹介しながら、次のように述べている。特に、ハート・ルイス、パルム・アブラーの演説に共通するものとして、「地理学が過度に専門化・多様化することに対しては斯学の性格をあいまいにしかねないという理由から、むしろ否定的であること、一方、地理学の中心的題材として重視されねばならないものとして、地誌、あるいは人間・環境の相互作用や場所・地域の複合性といった、どちらかと言えば、古典的なテーマが強調されていることであろう²⁹⁾。」と指摘している。本稿で地理的素養について若干の考察を試みたのは、実は地理的素養を磨いた個人個人の能力の開発、応用こそ地理学の有効性を今後も主張できると考えたからである³⁰⁾。数々の著作を発表し続けるピエール・ジョルジュに倣って言えば、「世界に関する個人的イメージの混乱を正すのに地理学がこれほど必要とされたことは決して無かったのである³¹⁾。」から。

追記 1996年度日本地理学会春季学術大会のシンポジウムⅢでは、「地理学の社会的地位をより高めるためには——地理学・地理教育の将来を論じる——」が1人5分のリレー発表で行われ、立見が出る程の盛会であった。(1996年3月29日、於慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス)

注

- 1) John K. Wright (1947):「Terrae incognitae: The Place of the Imagination in Geography」
A. A. A. G., 37-1, p.9
- 2) 大嶽幸彦 (1980):『国際化時代の地理学』大明堂
- 3) 両次世界大戦間のフランス地理学者の養成についてはニューマ・ブロックの考察がある。
Numa Broc (1993):「Homo geographicus: Radioscopie des géographes français de l'entre-deux-guerres (1918-1939)」Ann. de géogr., N° 571, 特に pp.232~235を参照。
- 4) Audrey Kobayashi et al. (1989):「Remaking Human Geography」Unwin Hyman, p. 159
- 5) 例えば、久武哲也は外国研究の意味について論じた中で、次のように述べている。
「19世紀の近代地理学の草創期にあった Naturgemälde, Cosmologie あるいは Naturschilderung という考え方の伝統、さらにまた、「旅行」という形式が自らの文化の反省を促す鏡であった時代の「紀行文学」、そうした旅を支えた人々の批判的観察の眼と異なった地域での経験を表現する方法——そうした蓄積は我々の調査への出立以前に改めて検討すべき素材と課題を残してくれているといえるのではないだろうか。」
久武哲也 (1985):「Old Song Now——外国研究の意味を問い直すこと——」地理科学, 第40巻第1号, p.57
1970年代に入っても、旅行の歴史は地理学史によって取り上げられていなかった。

- Hanno Beck (1977) : 「Das Problemfeld der Geschichte der Geographie」 Erdkunde, 31-2, p.82
- 6) Robert P.Larkin et al. (1993) : 『Biographical Dictionary of Geography』 Greenwood Press, p.13
- 7) André Meynier (1969) : 『Histoire de la pensée géographique en France』 P.U.F., p.17
- 8) 前掲 6) p.331
- 9) Anne Buttimer (1983) : 『The Practice of Geography』 Longman, p.90
- 10) 前掲 9) p.167
- 11) 前掲 7) p.13
- 12) 前掲 6) pp.230～231
- 13) 前掲 9) p.12
- 14) ピーター・グールド著・矢野桂司他共訳 (1994) : 『現代地理学のフロンティア (下)』 地人書房, p.117
- 15) 筆者はフランスの例で、学校・大学での地理教育のイメージに関するアンケート調査報告を紹介したことがある。一般の大衆が学校教育で受けた地理の否定的評価を挙げると、次の通りである。
「詰め込み教育、教え方が悪く能力が劣った教師、暗記学習、繰返しの、うんざりする、複雑な、むずかしい、ほとんど興味の無い、点数の悪さ、退屈、あまりにも学術的な、など。」
大嶽幸彦 (1994) : 「フランスにおける地理教育のイメージ」 地理, 39-12, p.94
- 16) Victor Prévot (1981) : 『A quoi sert la géographie?』 Éditions du Centurion, p.64
プレボ著・大嶽幸彦訳 (1984) : 『地理学は何に役立つか』 大明堂, p.98
- 17) 前掲 9) p.126
- 18) ヘットナーについては、特に次の文献が詳しく紹介している。ハンノ・ベックはヘットナーを影響力のある方法論者としてとらえている。
Hanno Beck (1982) : 『Große Geographen, Pioniere-Außenseiter-Gelehrte』 Dietrich Reimer, pp.213～228
- 19) 守田 優訳 (1993) : 『ヘットナー:地理学, その歴史, 本質および方法 (第V編～第IX編)』 大阪教育大学地理学報, 第29号, pp.47～160
- 20) 前掲19) pp.115～118
- 21) 前掲19) p.123
- 22) 前掲19) p.123
- 地理好きの少年・少女にとって、自転車は市内の各地を見て歩くのに重要な交通手段であった。福原正弘は次のように述懐しているが、同世代の筆者にとっても、1950年代中ばに自転車で歩き廻った町は異なっても同感である。
「自転車で行ける範囲を徐々にそしておそろおそろ拡大して堺の町を見歩いたものだった。現在のように道路交通が激しくなかったが故になしえたさやかな巡検であった。」
福原正弘 (1971) : 「人生の友——人文地理学——」 西川・河辺・田辺編 『地理学と教養』 所収, 古今書院, p.53
現時点では研究のフィールドへ車で行くことが普通であろうが、かつては自転車で調査地を廻ることが可能であったのである。
籠瀬良明 (1993) : 『地図の旅愁——谷・野・川と人びと——』 古今書院, p.14

- 23) 前掲19) p.121
 24) 前掲19) p.118
 25) 前掲19) p.120
 26) David Lowenthal (1961) : 「Geography, Experience, and Imagination:Towards a Geographical Epistemology」 A. A. A. G., 51-3, p.250
 27) Ronald F. Abler (1987) : 「What Shall We Say?To Whom Shall We Speak?」 A. A. A. G., 77-4, p.516
 28) 前掲27) p.519
 29) 石川義孝 (1989) : 「アメリカ地理学界の一断面」奈良大学文学部地理学教室編『地理学の模索』地人書房, p.121
 30) 1985年にアメリカ地理学者協会の会員数は5,700人であった。ちなみに、人類学は8,500人、生態学6,300人、経済学20,000人、地質学15,500人、歴史学16,000人、気象学10,000人、プランニング21,000人、政治学12,000人、社会学15,500人であったゆえ、地理学の相対的地位の低さが示されよう。(前掲29) p. 114)
 ところで、日本地理学会の会員数は1985年に3,120名、1995年に3,316名と10年経ってもあまり増加していない。(会員名簿による)ところが地理学評論に掲載された修士号取得者の数は、1990年度に国公立系89, 私立系22, 計111, 1991年度にはそれぞれ110, 27, 計137, 1992年度に108, 34, 計142, 1993年度に108, 38, 計146, 1994年度に127, 50, 計177と5年間で60%以上増加している。この数字が意味するものは、大学院修士課程の充実が日本地理学会の会員増に直接結びついているわけではないようである。
 31) Pierre George (1989) : 「Les hommes sur la terre, La géographie en mouvement」Éditions Seghers, p.206

参 考 文 献

- Henri Baulig (1935):『Géographie Universelle, Tome XIII, Amérique septentrionale』Armand Colin
 P.E.James et al. (1978) : 「The Association of American Geographers, The First Seventy-Five Years, (1904-1979)」Association of American Geographers
 Martin S. Kenzer ed. (1989) : 「On Becoming a Professional Geographer」Merrill Publishing Company
 Denise D.Rosenfeld (1991) : 「L'image de la géographie chez les Professeurs et dans la population française, premières données de l'enquête "Vous et la géographie"」Intergéo Bulletin, N° 104, Numéro spécial
 Roger M. Downs (1994) : 「Being and Becoming a Geographer : An Agenda for Geography Education」A. A. A. G., 84-2
 大嶽幸彦 (1980) : 『国際化時代の地理学』大明堂
 高野史男 (1985) : 「史観・地理観・世界観——中南米巡検からの考察——」地域研究, 26巻1号
 竹内啓一・正井泰夫編 (1986) : 『地理学を学ぶ』古今書院

山鹿誠次 (1987) : 『旅と風土』 大明堂

野澤秀樹 (1988) : 『ヴィダルド＝ラ＝ブラーシュ研究』 地人書房

中村和郎・高橋伸夫編 (1988) : 『地理学講座 第1巻 地理学への招待』 古今書院

大嶽幸彦 (1990) : 『旅と地理思想』 大明堂

大嶽幸彦 (1992) : 「地理的思考と地理的想像力に関する一考察」 上越教育大学研究紀要
第12巻第1号

日本地理学会 (1996) : 『日本地理学会予稿集 49』

A Note on Geographical Attainments

Yukihiko OHDAKE*

ABSTRACT

The object of this research is to consider some problems of geographical attainments on the basis of domestic and foreign bibliographies.

The geographical attainments can be formed through a variety of processes, but the author has argued particularly the relationship between a long-period travel and the formation of geographical attainments. Concerning the essence of geographical attainments, he has analysed them from three points of view; that is to say, firstly increasing the knowledge of geomorphology, secondly seeing keenly landscape and analysing its meaning, and lastly practicing the trip on foot.

* Division of Social Studies, Department of Humanities and Social Sciences